

三角縁神獣鏡を分析し、 古墳時代社会から 国家の成立過程を探る

墓と副葬品が示す
古代山陰文化の特徴

日本で本格的に水田耕作が始まった弥生時代、連携や争いを経て多くの集落が形成されました。これに続くのが、3世紀中頃から7世紀頃とされる古墳時代です。「いくつもの地域社会に分かれていた弥生時代と比べ、日本全域をほぼ覆う枠組みができました」と岩本准教授。中央政権と地方との恒常的な関係が形成されていく過程をひも解く中で、大きなポイントになるのが前方後円墳です。「かつては各地に様々な墓があり、大きな墓は作られませんでした。しかし古墳時代には、前方後円墳という形式の墓が日本列島中で造られました。大きな墓を作ることで

地域社会の結合を確認する。有力者を葬る時には前方後円墳という形を用いる―そういう共通認識が全国的に浸透していたと考えられます」。

そんな中、二線を画しているのが山陰地方です。3世紀中頃に西日本のほとんどの地域で造られた前方後円墳ですが、山陰に登場するのは4世紀初め頃。鳥取県南部町の浅井11号墳が、山陰最古だと考えられています。ただ、山陰にも3世紀から各地と共通するものがあります。副葬品の三角縁神獣鏡です。墓の形は他の地域に倣わなかったものの、鏡を入手して保有するという意味は、早期に受け入れたのです。

「山陰は、弥生時代から大きな方墳を造っていた地域。新しさより伝統を重視したのでしょう。一方、王権に認められた格付けの証ともされるアイテム―三角縁神獣鏡は、各地と同時期に取り入れられました」。例えば安来市の大成古墳や造山古墳は、全国的に、前方後円墳ブーム、真つ只中に造られたにも関わらず、国内最大級の方墳。しかし、いずれからも三角縁神獣鏡が発掘されています。「考古学のフィールドは近畿と

前方後円墳を始め、円墳や方墳など、日本各地で十数万基もの古墳が造られた古墳時代。社会文化学部の岩本准教授は、現代の日本につながる国家の原型ができたターニングポイントととらえ、当時の社会実態を研究しています。特に注目しているのが、有力者層が古墳に多数副葬した銅鏡です。



PROFILE

法文学部 社会文化学科
岩本 崇 准教授
いわもと たかし

大学では英語を学ぶつもりが、縁あって考古学研究室へ。友人と出向いた銅鏡の企画展で、迫力に圧倒されて関心が深まりました。兵庫県の茶すり山古墳での調査では、自ら銅鏡を発掘したことも。現場でしか得られないものも多い発掘調査は、考古学の基本ですね。

九州が中心ですが、いずれとも距離がある山陰には、独特な文化が存在するのです」。

埋葬方法や石材にも
独自のこだわり反映

岩本准教授は、埋葬方法の違いにも着目します。「近畿では、くり抜いた石の中に遺体を納める密閉性の高い棺を用いますが、山陰の棺は、内部が一部外から見えるような形式です。死んだ妻イザナミと、夫イザナギとのやり取りを描いた黄泉の国神話も、出雲だから成り立つのです」。棺を密閉しない出雲では、石室の屋根も高め。「千年以上前のものづくりにも、地域の意識が反映されています」。

現在、総合理工学部の亀井淳志教授と、石材の原産地を同定する共同研究を実施。大橋川周辺では、近隣に石があるにも関わらず、安来や来待など遠方の石が使われていたことなどが分かりました。「地域社会をコントロールする有力者がいたことが分かります。未解明事項も多く、奥深いのも考古学の魅力ですね」。



1. 安来市久白町にある矢田古墳群の横穴墓。近畿と異なり中を見せる形式の石棺となっている。2. 雲南市加茂町の神原神社古墳から出土した三角縁神獣鏡。3. 鏡の断面を実測する岩本准教授。4. 発掘調査の様子。報告書だけでは分からない、現場だからこそ得られる情報があるという岩本准教授。学生たちには積極的に現場に出よう伝えています。

